



Good Job! Document

「福祉」と「仕事」の
これからの関係づくり

Vol. 03

2014. February

Contents:

Good Job! Collaboration

File 05

Good Job! 東北プロジェクト ×
Able Art Company

File 06

graniph × JOY倶楽部アトリエブラヴォ ×
NPO法人 Tsunagu family

Good Job! RECOMMEND

01 「新・幻聴妄想かるた」

02 そよそよ柄のブラウスとワンピース

BOOK REVIEW

SELECTOR: 中村陽一

福祉、企業、NPO、自治体、研究機関など各分野の専門家が手を組み、新しい仕事をつくり出す「Good Job!」。「Good Job! Document」は、そういった「Good Job!」の思想・活動を広く伝えることを目的に生まれました。「Good Job!」から生まれたプロダクトを中心に、そこに込められた想いやプロセスを紹介。企画・製造・流通など商品開発に携わる、さまざまなプロフェッショナルの言葉を通して、これからの「仕事」「ものづくり」「福祉」のあり方、可能性について探ります。



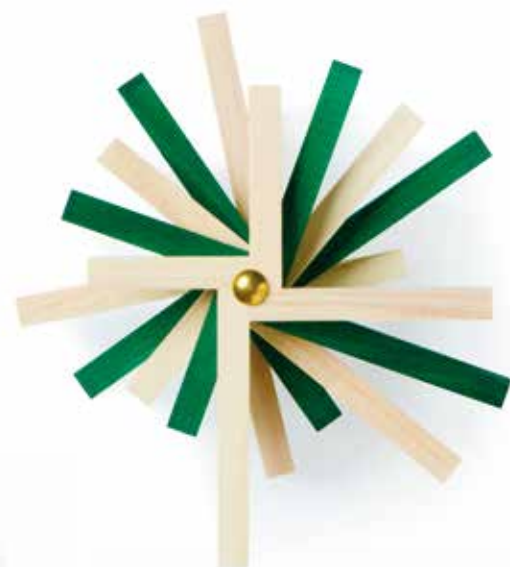
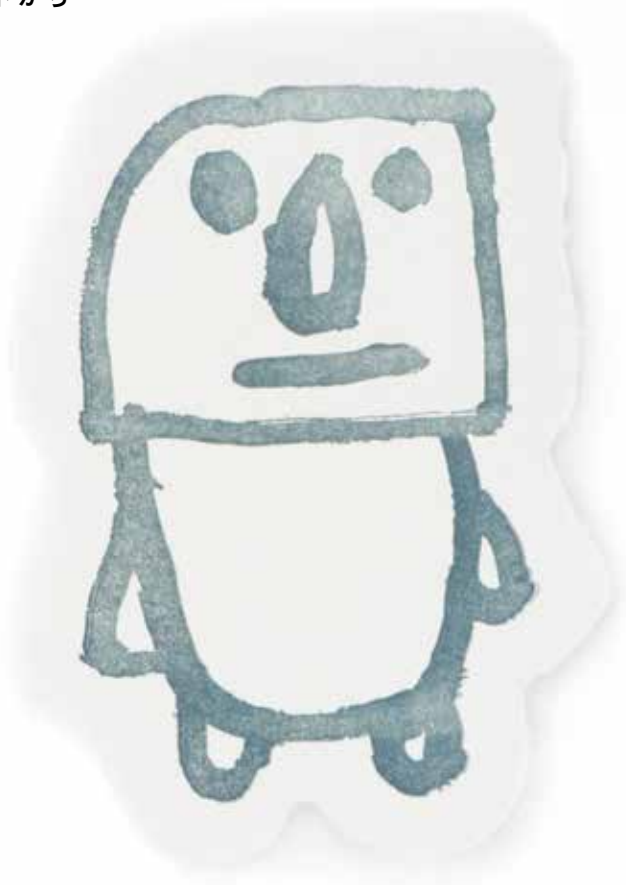
File 05 福祉とデザインによる、新たな仕事づくり

Good Job! 東北プロジェクト × Able Art Company

被災地に住む障害のある人たちの
新たな仕事づくり支援活動

アートマネジメントオフィス

東日本大震災をきっかけに生まれた「Good Job! 東北プロジェクト」。被災地に住む障害のある人たちの新たな仕事づくりを支援する活動として、2013年4月より始動しました。東北被災地を拠点とする福祉施設とデザイナーが連携した商品開発企画のモデルケースとして実施したプロジェクト、宮城県南三陸の作業所による「NOZOMI PAPER Lab. (のぞみペーパーラボ)」、福島県内の3つの事業所による「botanippe (ボタニッペ)」、ふたつのブランドから新商品が誕生しました。



▲ 障害のある人たちの商品開発ワークショップから生まれた「botanippe」第一弾の木製オーナメント。そして、「NOZOMI PAPER Lab.」による変形手漉き紙のペーパーアイテム。一つひとつ高い技術に裏打ちされたクオリティの高さが光る商品です。

photo: Kouda Masahiro

東北の事業所とのコラボレーション！

前川さん、MUTEさん、柴崎さん、 どうやって実現したんですか？



デザイナー
前川 雄一さん
「NOZOMI PAPER Lab.」のディレクター兼
デザイナーを務める



デザインユニット「MUTE」
イトウ ケンジさん、
ウミノ タカヒロさん
グラフィック/プロダクトデザインを手がける。
「botanippe」ディレクション兼デザイン担当



エイブルアート・カンパニー
柴崎 由美子さん
デザイナーと作業所をつなぐ、事務局の担当者。
東北プロジェクトの発起人でもある

——「Good Job! 東北プロジェクト(以下、東北PJ)」から生まれたブランド「NOZOMI PAPER Lab. (以下、NPL)」と「botanippe」。デザイナーと障害のある人たちの対話や感性から生まれたプロダクトの制作過程をふりかえり、プロジェクトにかかる想いをお聞きました。

Q1

本プロジェクトをはじめたきっかけについて聞かせてください。

柴崎: 2011年の東日本大震災により、障害のある人たちやその支援者の方々が、甚大な被害を受けたのが大きなきっかけです。震災直後は、救援活動やアートワークショップを通した寄り添い型の支援を行っていましたが、2013年4月より「東北PJ」が始動し、被災地の福祉施設とデザイナーをマッチングさせ、魅力的な商品の開発と販売も目標に加え、活動を行っています。まずは、モデル事業をつくるため、特に被害が大きかった宮城県南三陸町の「のぞみ福祉作業所」、福島県内の3事業所と連携して商品開発を行いました。

前川: 僕は、東京を拠点にデザイナーとして活動しています。東北の支援がしたいと、南三陸・入谷の廃校を利用して、地域の特産物や内職を通じて町の雇用につなげる「入谷Yes工房」と協働していたんです。その流れで2012年10月頃、柴崎さんたちのチームとともに、「のぞみ福祉作業所」を訪れ、「NPL」の立ち上げに携わることになりました。

MUTE[イトウ(以下、イ)]: 僕たちは、普段プロダクトやグラフィックデザインの仕事をしつつ、福祉事業所とのワークショップ(以下、WS)や商品開発を行っています。2013年にコーヒー専門店「OBSCURA COFFEE ROASTERS」とギフトグッズをつくった際に、千葉県木更津市の福祉作業所「hana」とお仕事をさせていただきました。そういったご縁から、福島県にある「コーヒータイム」「須賀川共労育成園」「えんどう豆」の3事業所と協働して、2013年6月よりオリジナルブランド「botanippe」をスタートしたんです。そこではMUTEディレクションのもと、第一弾となる木製オーナメントをつくりました。

Q2

各作業所の特徴について、またどのような経緯で商品企画が生まれたのか、教えてください。

柴崎:南三陸町の「のぞみ福祉作業所」は、津波の被害で建物が全壊しましたが、直後よりプレハブでの活動をはじめていました。しかし、震災後は受託作業が激減。全国からの支援により、紙漉きの道具一式と技術提供を受け、牛乳パックから「手漉き絵はがき」の製作をはじめていました。

前川:僕が訪れたとき、すでに「紙漉き」自体が、やりがいと生きがいを含んだ「仕事」へと変化しつつありました。ここで生まれる紙を「NOZOMI PAPER」と名付け、「手漉き」の風合いを生かし、さまざまな支援をいただいたつながりとして、使用する人の想いを伝える「ペーパーアイテム」として製品化しました。

柴崎:一方、「botanippe」は、福島県内にある3つの事業所が協働して立ち上げることになりました。そのひとつ、カフェ兼作業所「コーヒータム」は、原発事故で警戒区域に指定されたため、2011年10月より浪江町から二本松市に移転。南相馬市の「えんどう豆」も一時閉鎖していましたが、2011年6月に再開しました。「須賀川共労育成園」もほかの2事業所と共通して仕事が激減している状況です。

MUTE[ウミノ(以下、ウ)]:まずは各作業所を視察し、約1ヵ月かけてコンセプトや全体の流れを提案しました。作業所のメンバーとWSを重ね、最終的には、各施設の特徴を生かす木製オーナメントをつくることになりました。製作は、木工や農作業に特化した「須賀川共労育成園」が木材の加工を、細かな手作業を得意とする「コーヒータム」が組み立てを、絵を描き歌うことを主な活動とする「えんどう豆」は「botanippe」のロゴやブランドイメージを、それぞれ担当してもらいました。

Q3

製品づくりを協働する上で、意識していたことは何でしょうか？

前川:はじめて「のぞみ福祉作業所」を訪れたとき、ものづくりに対する意識の高さに驚きました。さまざまな行程や工夫を経て、出来上がった「手漉き絵はがき」は、施設への支援の気持ちに応える商品として完成していて、応援したい気持ちになる。そこからさらに僕ができることは何か、意識しましたね。

柴崎:2013年に福島のセミナーで、AXISギャラリーのキュレーター・佐野恵子さんが「チャリティプロダクトではなくてデザインプロダクトにシフトしているかがポイントだ」とお話されていて、私たちの指針も、ここだなと思いました。各分野のプロが各々の役割を担うことで、はじめて製品が成り立つ。

MUTE(ウ):そう。作業所の方々と言葉を理解し合い協働する環境をどう設計していくか。そのため、手を動かしながら意見を交わしていくWSの時間を大事にしました。関わるからには、MUTEだからこそできる角度から商品開発を試みたいですからね。

Q4

現在、取り組まれているプロジェクトの特徴をどのようにとらえていますか？

柴崎:「NPL」のカードは、作業所のみんなががんばる部分と外注する部分とを整理。お互い相乗していけるものづくりシェアのあり方も含めて提案しました。

前川:アートだけではなく「ものづくり」の質にこだわることも、このプロジェクトの特徴と言えます。良いものをつくれれば自信に、そして自信はプライドに。また、技術や人のつながりなども施設にとって継続可能な価値になるのではないのでしょうか。

MUTE(イ):須賀川共労育成園の大原さんは、仕事をシェアすることを気にしていました。人を選ぶ作業をつくらない、ということを徹底していましたね。

柴崎:避難するときも居住地を決めるときも事業所がともに集まり話しあう。障害のある人を家族が違ふところに避難させたとき、近くの事業所がその人を受け入れる。その感覚が福島では共有されています。東北全体が課題や仕事をシェアしないと生き残れない切実さをもっている。そこから学ぶべきことがたくさんあります。

Q5

今後の展望を聞かせてください。

MUTE(イ):試作がようやくできた状況なので、長くブラッシュアップしていくため、継続して関わっていきたいです。そのためにも、作業の対価が得られる仕組みを構築することが課題ですね。

前川:ものづくりに関わる人たちが東北というつながりのなかで手間をかけて、想いを込めてつくったものだからこそ、大量生産品とは異なる、目に見えない価値や物語を見せていきたい。そうすることで、新しい消費のあり方をつくれるんじゃないかな。

柴崎:被災地における障害福祉の現場復興は、建築や雇用であれ、一般事業者の動きよりも2年か3年遅れています。しかし、国の支援は縮小傾向にある。福祉事業所の復興に向けた長い道のりを、辛抱強く向き合っていけるかがポイントになりますね。

Good Job! 実現のポイント

1. 各自の得意分野を生かせる協働環境をつくり出すこと。
2. 各々の課題や仕事をシェアし、持続可能な連携システムをめざすこと。
3. 既成のデザインにとらわれず、新たな領域に挑戦する姿勢をもつこと。

8 TOPICS

出会いが生み出す、ものづくりの楽しさ！



ものづくりブランド「botanippe」は福島県内の3つの福祉事業所が協働し、製品開発をスタート。障害のある人、施設職員、デザイナーが協力しながらアイデアを出しあうWSでは、商品開発だけではなく、ものづくりの楽しさを知る機会となりました。

こだわり抜いた独自の技術！



「NPL」は紙漉きの商品価値を高めるために、断裁ではなく手漉き下段階で変形サイズにできる技術を独自に開発！柔らかなエッジが可能になりました。ペーパーアイテムになった南三陸町のシンボル・モアイ像は菅原知也さんが描きました。

プロジェクトを支える企業の支援！



震災以後、武田薬品工業株式会社では「私たちは3.11を忘れません」のスローガンのもと、「復興支援企業内マルシェ」など多くの支援活動に労役で継続的に取り組んでいます。「Good Job! 東北プロジェクト」は、「タケダ・いのちとくらし再生プログラム」助成事業の支援をうけて活動しています。

！わたしたちも参加しています！

デザインによる価値観の創出。
カッコいい福祉をめざそう



佐野恵子 AXISギャラリー キュレーター／石巻工房実行委員

デザインの役割は、モノ・コト・ヒトを通じて「生活や社会をより良くしていく」こと。その領域は、目に見えるものに限らず、多岐にわたります。今回、福島の福祉作業所が置かれている現状を知る機会をいただき、ここにもデザインができることが多くあると痛感しました。限られた世界のなかだけでは解決できないことも、異なる領域からの視点で見ることで「目からウロコ」のアイデアが生まれ、これまでにない挑戦がはじまるかもしれません。

多様なブレンが集まり、
現場でつながるアイデア



大原寛和 社会福祉法人牧人会須賀川共労育成園
目標工賃達成指導員

デザイナーとのWSを通じた商品開発は、福祉事業所が普段行う作業とは違い、新しいものづくりのあり方を感じられるものでした。また、複数の事業所や専門家が、得意分野を生かし連携することは、商品開発や作業において効率的であり、福祉に求められるネットワークづくりにもつながる取り組みだと思います。そしてその連携が、さらなる取り組みをつくり出すと感じました。今後も「デザイン力」「連携力」をキーワードに、福祉のものづくりを考え、携わっていければと思います。

Good Job! 東北プロジェクト

始動年：2013年

東日本大震災の影響によって仕事を失った福祉事業所に対し、アートやデザインの側面から障害のある人たちの仕事づくりを支援。主に岩手、宮城、福島県を拠点に活動し、WSを通して福祉事業所ごとの商品開発のほか、スタディツアーやセミナーなども実施。

エイブルアート・カンパニー

<http://www.ableart.org/>

設立：2007年 事務局：東京・奈良・福岡

障害のある人がアートを仕事にできる環境をつくることを目的に設立。障害とアートを軸に活動してきた3つのNPOが共同で運営。障害のある人による造形作品(絵画・イラスト・書など)を広告や商品のデザインに生かすことで仕事につなげている。







File 06 現場レベルのコミュニケーションが生んだ仕事の仕組み

JOY倶楽部 graniph × アトリエブラヴォ × NPO法人 Tsunagu family

デザインTシャツストア

障害福祉サービス事業所
アート部門

障害者の自立支援・雇用創出事業

障害のある人たちの自立支援と雇用創出事業を行うTsunagu familyの企画により、個性豊かなデザインTシャツブランド・graniphと福岡の障害福祉サービス事業所JOY倶楽部のアート部門であるアトリエブラヴォとのコラボレーションが実現。障害の有無にとられず、「各々のアーティストが手がけた作品を届けたい」という思いから、ユニークなデザインのTシャツが誕生、2013年8月より販売が開始されています。



作・近藤純平



作・三谷由美



作・川上勇樹

▲ アトリエブラヴォ所属作家によるイラストは、やさしくゆるい雰囲気から大胆な色彩やタッチが特徴的なものまでさまざま。作家それぞれの個性を生かし、デザインされたTシャツは、シンプルで大胆な構図が特徴です。2013年8月に全13種を販売。

photo: Kouda Masahiro

大手Tシャツストアと作業所のコラボ！ 原田さん、城島さん、新田さん、 どうやって実現したんですか？



障害福祉サービス事業所 JOY倶楽部副施設長
原田 啓之さん

JOY倶楽部の副施設長として、アトリエブラヴォのマネジメントに携わる



Tsunagu family 代表理事
城島 薫さん

長崎を中心にNPO法人の運営に携わる。本プロジェクトの発起人でもある



Tsunagu family 理事／株式会社SRL社長
新田 寛之さん

graniphをこのプロジェクトに呼び込むなどのコーディネートに携わる

——Tsunagu familyの企画により生まれた、graniphとアトリエブラヴォとのコラボレーションTシャツ。企業と作家、つなぎ手の3者それぞれの丁寧なやりとりにより、「障害者アート」という枠にとられない商品開発が実現しました。今回は、その過程をふりかえり、プロの仕事として徹底的にこだわりの、それぞれの想いについてお聞きしました。

Q1 本プロジェクトがはじまったきっかけを教えてください。

城島：きっかけは、2012年8月にNPO法人Tsunagu familyを立ち上げたことでした。以前から「工房まる」による障害のある人たちによる絵を使った商品を目にし、素敵だなと思っていたんです。その後、偶然、graniphの運営代行を手がける株式会社SRLの新田社長から、工房まるさんをご紹介いただき、作品を見せてもらったところ、絵の魅力に惹かれてしまいました。そこから「この絵をたくさんの人に見てもらいたい！」という気持ちが湧いてきたんです。

新田：僕たちがgraniphの運営代行を行っていることもあり、今回のコラボレーションが実現しました。ただ、僕はTsunagu familyの理事でもあるのですが、これまで「商売で利益を上げること」を主軸に活動していたので、「利益を上げること」と「福祉」が自分のなかでまったく結びつかなくて。けれど、城島さんから最初に「福祉としてではなく、ビジネスとして、アートとしてやりたい」とお話いただいたんです。それならば、同じ土俵に上げたとき、どのような評価が得られるかを知りたいと思い、Tシャツを商品化することになりました。

原田：最初は、長崎・アミュプラザのイベントにてTsunagu familyさんと出会ったことがきっかけで、オリジナルグッズの販売のお話をいただきました。Tシャツの刷りは、Tsunagu familyさん関連のTsunagu工房で行っていたため、企業が入らないとできない工程を、ある程度福祉施設の方々が動いて回すことができた。その成功をきっかけに、今回のお話もいただきました。

Q2

商品をつくる上で、技術面での苦労や印象に残るエピソードがあれば教えてください。

新田: graniphがプロとして私たちの仕事をとらえてくれているので、その想いにきちんと応えなければ、というプレッシャーはありましたね。もちろん最初は無理があるので、まず可能な作業範囲を明確にしろ、それを理解する。その上で、出てくるものに対してはプロとして厳しい目線で見ます、という条件で商品開発を進めました。だけど、やっぱり難しい部分もありましたね。

城島: どんな仕事もそうですが、スケジュールがタイトなんですよ。デザインをあげたり、絵をセレクトしたり、結局納期に間に合わないことも……。やっぱり障害のある人たちは、1日にできる作業量や働ける時間にも限りがあります。だけど、企業との取引なので、甘えがあってはいけない。だから、スケジュール通りに作業を進めていかないと成立しない。

新田: やはりビジネスとして関わる以上、みんな同じプロのデザイナーとして扱われます。今回は特に前提として、福祉として関わるのではなく、その垣根を無くすことに共感して仕事をしている。だからこそ、どちらかが一方に頼ってしまうと、継続できなくなるんです。だから“できる範囲”でというのは、とても重要だったと思います。

Q3

プロジェクトを進める上で、意識したことやこだわりなどはありますか？

原田: 変化球のデザインも受け入れることができる graniphさんが相手なので、Tシャツに使用する絵を選ぶときには、あえてアパレル関係者が使わないような絵も含めて提案するよう心がけました。その結果、いろんなデザインパターンが生まれ、アトリエブラヴォと graniphさんとでしかつくれないTシャツをつくることができたと思います。

新田: graniphさんには、世界中からTシャツのデザインが送られてくる。だけど、アトリエブラヴォさんから届くデザインは、商品にするか否かは抜きにして、とにかく「楽しい!」という感覚で選んでいると聞きました。障害者アートを支援するという想いではなく、プロとのコラボレーションだからこそ生み出せるものを、という感覚でデザインをチェックしている。また、そこにある「楽しさ」を、売れるものへと転換することも大切にしていたと聞きました。

城島: 僕は、いつも競争力のある商品にしたいと思って取り組んでいます。障害のある人のアートだから、何か特別なイベントだから売れるのではなく、数あるデザインのひとつとして、売れる商品をめざしたいという意識をもっているんです。

Q4

今回のコラボレーションを通して、どのようなことを感じましたか？

城島: 障害をもつ人たちのつくったものが、全国の店舗に並んでいる状況を生み出したことは、大きな

喜びですね。作家たちも、すごく嬉しそうでした。また、買ってくれる人たちも、数多くの商品のなかから選び抜いて購入してくれる。そこに障害がある人が描いたという情報はいらなくて「良い!」と思って買ってくれる状況をつくるのが大切なんです。

原田: 今回、新田さん、城島さん、そして graniph さんも関わってくれるということで、作家たちのアトリエを見学してもらったんです。彼らが描く空間に足を運び、つくり手と描き手がコミュニケーションを取る機会があったことは、大きな意味がありました。

新田: 僕は、城島さんが Tsunagu family で障害のある人に関わるのを見て、自分の会社でも障害のある方を採用したんですよ。もちろん不安もありました。しかし、コミュニケーションが不得手だからこそ、社員同士のコミュニケーションも活発になったことに気づいたんです。ともに仕事をする中で、教えることも教えられることも多く、お互いが対等に必要とする関係性が生まれています。

Q5

プロジェクトを終えて見えてきた課題と今後の展開をお聞かせください。

原田: 障害の程度によって、それぞれ理解力も違う。だから、いかにクライアントから頼まれたことを伝えていくかは、いつも課題ですね。graniphさんとのコラボレーションでは、“売れるものをつくる”だけではなくアトリエブラヴォの特徴を生かしたアートとして実現できました。今後も、“売れる”という基準のなかでものづくりはしていきますが、いかにアトリエブラヴォのメンバーの個の部分を大事にできるかが課題だと思います。

城島: Tsunagu family の活動を伝えていくと同時に、ビジネスとして活動していくことからずれないようにしたいですね。プロとして、完成した商品をつくり、さまざまな人をつなぎながら、マネジメントしていくための仕組みづくりを確立していきたいです。

新田: 福祉においても、ビジネスとして収益を上げることが重要です。それが利用者に対して負担のない福祉になっていくと思います。まずは、継続していくためのお手伝いが少しずつできればと思っています。

Good Job! 実現のポイント

1. 消費者に「届けたい」という、情熱や信念を常にもち続けること。
2. 「福祉としてのアート」ではなく、プロの仕事としてこだわりぬくこと。
3. それぞれの団体が対話を重ね、互いに理解を深めながら製作すること。

8 TOPICS

まちなかアートミュージアム開催



2013年11月、長崎市浜町エリアのショップ協力のもと行われたイベント。工房まる、アトリエブラヴォ、TSUNAGUアートワークスに所属する障害のある人の作品をまち行く人たちが自由に観覧できるよう、ショーウィンドーや店内に展示。多くの人の目に作品が触れる機会となりました。

地元のお茶屋さんと商品開発！



長崎にある老舗「お茶の秋月園」と Tsunagu family が共同制作した「TSUNAGU ART MUSEUM」期間中のオリジナルノベルティ。緑茶、ほうじ茶、和紅茶の各パッケージに障害のある人のイラストを起用。一時欠品して追加生産するほど好評でした！

まちに自分たちのアート作品を開く



「アトリエブラヴォ」の活動は、アート作品の提供だけではなく、まちなかの壁面にイラストを描いたり、お店の内装を手がけたり、音楽フェスや地域の自治体などからイベントに呼ばれてライブペインティングをしたりと幅広い表現活動を精力的に行っています。

！わたしたちも参加しています！

仕事を継続して生み出す、仕組みと向き合う工房



富永隆一 障害者就労支援センター 施設管理者

シルクスクリーン印刷工房「TSUNAGU工房」を整備して障害者の職域拡大とそこで就労する障害者の包括的な支援を実施しています。現在は、大手Tシャツ販売会社からの定期発注をいただき、毎日4名の障害者が就労。理事長を中心とした Tsunagu family の多様なネットワークの力によるこれまでの障害者就労支援とは一線を画した取り組みに、大きな可能性を感じています。1歩ずつ活動の輪を広げていきたいと思っています。

多分野で活躍する人たちのつながりが生む、働くかたち



羽山潤一 デジグラフィ代表／アートディレクター

城島理事長のアツい想いに共感し Tsunagu family の立ち上げから関わらせていただきました。ロゴやリーフレットのデザイン、昨年11月のイベントではフライヤー制作や商品開発を行いました。作家さんとお茶屋さんのコラボレーションでお茶のパッケージを手がけたことも。Tsunagu family は、いろいろな得意分野をもつ方々が自然と集まってくる場ですから、そのつながりをもっと強くすることで、さらに大きなモノやコトを起こせるのではと期待しています。

graniph
http://www.graniph.com/
創業：2000年 本拠地：東京都
「Tシャツ×アート」をテーマに掲げ、日本全国に約70店舗展開するオリジナルデザインTシャツストア。世界中のさまざまなアーティストや企業とのコラボレーションによって制作され、ジャンルにとらわれない個性豊かなデザインが特徴的。

アトリエブラヴォ
http://www.joy-club.jp/atelier-bravo/
設立：2002年 本拠地：福岡県
知的障害者の文化的な社会参加の支援をめざす障害福祉サービス事業所「JOY倶楽部」のアート部門として活動中。現在12名のアーティストが創作活動を行い、作品の制作・販売などによって社会とのつながりを広げている。

NPO法人Tsunagu family
http://tsunagu-family.org/
設立：2012年 本拠地：長崎県
障害のある人たちが積極的に参加できる仕事と環境づくりをめざして活動するNPO法人。各分野で活躍する個人や団体ももち寄った知識、技術、経験などの「できること」をつないでいき、障害のある人が参画できる事業活動を起こしている。

Good Job! RECOMMEND

「Good Job!」な活動を紹介します！

オリジナルロゼット製作：大野紅



Data 05：「遊び」へと変換する発想力がすごい！

新・幻聴妄想かるた

／ハーモニー（就労継続支援B型事業所）[東京]



http://www.geocities.jp/harmony_setagaya/

前作『幻聴妄想かるた』から6年、ついに新作となる『新・幻聴妄想かるた』がリリースされました。「わたしが宇宙の支配者です」「つらいなぁ生活が友達に貸した金が返ってこない」といった不思議な詠み句が特徴的。「多くの人に精神障害について知ってもらいたい！」という想いから、精神障害による幻聴や妄想の実体験にもとづき、制作されました。かるた遊びを通して、幻聴妄想の世界に触れることで、精神障害のある人の「居場所」について考えるきっかけを与えてくれます。

活動団体からのコメント

幻聴や妄想とともにある等身大の生活をそのまま「かるた」にしました。齋藤陽道さんの撮影によるポートレートをふんだんに使った付属の冊子「天国」には、日々の楽しいこと、悲しいこと、うれしいこと、悔しいことがたくさんつまっています。新澤克憲（ハーモニー施設長）



Data 06：ファッションブランドとのコラボが素晴らしい！

そよそよ柄のブラウスとワンピース

／ダブディビ・デザイン×フェリシモhaco、NUSY

<http://www.felissimo.co.jp/s/ccp38/>



障害のある人が生み出すアート作品をもとに商品開発を行っている「ダブディビ・デザイン」と通販カタログ『haco.』のブランド「NUSY」とのコラボ第三弾が登場！ 姫路にある福祉事業所「手織屋ゆう」で生まれたアート作品をダブディビ・デザインがテキスタイルデザインにアレンジ、さらにそれをファッションと結びつけることで、新しい仕事が見いだされています！『haco.38 2014年春号』をぜひチェックしてみてください！

※株式会社フェリシモは、2003年より「CCP(チャレンジド・クリエイティブ・プロジェクト)」を展開しています。

活動団体からのコメント

福祉事業所の片隅に埋もれているダイヤの原石を見つけ、ピカピカ輝くダイヤに磨きあげお客様に届ける、そんな活動です。全国のダイヤの原石の情報提供、お待ちしております！ 柊 伸江（株式会社ダブディビ・デザイン代表取締役）

BOOK REVIEW

これからの福祉や仕事を考える3冊



中村 陽一
[社会デザイナー]

01



『HELLO WORLD

「デザイン」が私たちに必要な理由

著：アリス・ローソン（訳：石原麗子）
発行：フィルムアート社/2013年初版

デザインは人々の生活との交信のなかでこそデザインたりうる。ゆえに誰もがデザイナーになれる。野生の社会デザイン(学)を志す者への素敵な招待状。

02



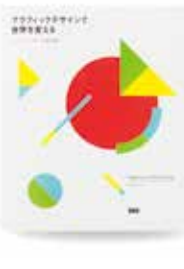
『ワーク・シフト

孤独と貧困から自由になる働き方の未来図<2025>

著：リンダ・グラットン（訳：池村千秋）
発行：プレジデント社/2012年初版

著者の言う3つのシフトは示唆に満ちている。だが同時に、日常への詳細な問いから得た答えを編み上げていくプロセスはまさに社会デザインによる仕事だ。

03



『グラフィックデザインで世界を変える』

著：アンドリュース・シー（訳：北村陽子）
発行：ビー・エヌ・エヌ新社/2013年初版

01と02のまさに応用編。コミュニティ「とともに」デザインする野生の社会デザインの仕事事例を、戦略とケーススタディと物語から記述してキラリと光る。

3冊の本を選んだ理由

「野生の社会デザイン(学)」を探究したいと考えています。ちょっと良いアイデアといった「social design」が流行り出すなか、筆者が模索し続けてきたソリューション(課題解決)を志向する社会デザインから、さらには構造的なイノベーション(社会を変える)を現実のものとする「Social Design」へと進むためにどうしても必要な態度だと思うからです。他者(の生活)と出会い、交信し、その関係性のなかで当事者性にも出くわす。そんな更新作業(対象化)の連続はダイアログとしてのデザインであり、01の象徴的な結びとなっているデザインをデザインし直すこと＝野生の社会デザインなのではないでしょうか。

中村陽一/1957年金沢生まれ。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授、社会デザイン研究所所長。現場と往復する「野生の社会デザイン学」により、「いまここではないどこかとなにか」をリアルに追い続ける。

MESSAGE

樋口龍二（NPO法人まる 代表理事）

2月15日(土)～17日(月)、福岡・天神にあるインターメディアステーション・イムズ(福岡市)で開催予定だったGood Job!展は、大雪の影響のため16日から2日間の開催となりました。会場は地下2階のイムズプラザ。福岡市中心街の地下通路を結ぶ大きな広場に展示させていただいたおかげで、展覧会を目的に来場された方はもちろん、買い物に来たお客さまやたまたま会場を通った人たちにもご覧いただきました。福岡は地方都市ではありますが、障害のある人たちのアート活動

が盛んな地域ということもあり、「ついにこんな時代が来るようになったんですね？」と、来場者から嬉しいお言葉をいただきました。福祉関係、企業関係者だけではなく、行政やNPO、大学関係者などさまざまな分野の人たちにもご来場いただき、「未来のしごと」の可能性について語り合う場面も。次年度の開催には、また新たに福岡(九州)でのGood Job!な取り組みを紹介できるように、次のチャレンジを仕掛けていきたいと考えています。



photo: Road Izumiya

Exhibition information

障害のある人たちのARTと社会的なINNOVATION

Good Job!

TOKYO	MIYAGI	FUKUOKA
2013.11/29 (Fri.) - 12/1 (Sun.) 渋谷ヒカリエ 8F 8 / COURT	2013.12/15 (Sun.) - 12/17 (Tue.) ● せんだいメディアテーク1F ● オープンスクエア	2014.2/15 (Sat.) - 2/17 (Mon.) イムズB2F イムズプラザ

【Good Job! Document 03】 発行日：2014年2月28日 発行元：財団法人たんぼの家 〒630-8044奈良市六条西3-25-4 Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501 E-mail goodjob@popo.or.jp URL <http://goodjobproject.com> 監修：Good Job!プロジェクト 編集ディレクション&編集：多田智美(MUESUM) 編集：永江大(MUESUM) アートディレクション&デザイン：原田祐馬(UMA/design farm) デザイン&イラスト：廣田碧(UMA/design farm) 印刷・製本：株式会社シーズクリエイト
*本フリーペーパーは、右記の展覧会開催に際し発行されました。【Good Job! 展】 主催：財団法人たんぼの家 後援：宮城県、仙台市、福岡市 助成：日本財団、仙台市民文化事業団 特別協賛：コクヨファニチャー株式会社、トヨタ自動車株式会社 協賛：株式会社竹尾、九州ろうきん、タビオ株式会社、仲内株式会社、株式会社西山ケミックス、ハルワコミュニケーションズ株式会社、明治安田生命保険相互会社 協力：イムズ、渋谷ヒカリエ、NPO法人エイブル・アート・ジャパン、NPO法人まる

